

図書室月報

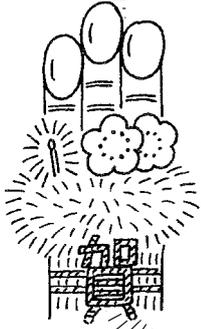
2022年(令和4年)1月5日

第704号

〈アンケート特集〉

2021年 印象に残った本

公民館図書室利用者・講座参加者の方に、
「今年印象に残った本」アンケートに答えていただきました。
皆さんのおすすめの本をご紹介します。



『1日10分の「ほこび」』

原田マハ他(双葉社)

上野 千晴



友だち、家族、自分自身。普段、人の見えている姿というのは、その人のほんの一部で、ある切っ掛けにおいて見え方や係わり方に変化が訪れる事がある。その「ある切っ掛け」が紡がれた作品を楽しめる一冊。人が一歩、前へ踏み出してゆく物語が並ぶ。原田マハ『誕生日の夜』は、読了感が爽快だ。吉本ばなな『みどりのゆび』も、心を決めた者の強さを感じて、締め括りの一作として意味があると感じた。作者陣の贅沢さよ。

『間宮兄弟』

江國香織(小学館)

山口 かほり



30歳を過ぎても同居する間宮兄弟。女性には縁がありませんが、仲が良く趣味も多いため、楽しく過ごしています。そんな

二人の日々を描いた作品です。国立に住んで一年半、今年九月に妹が引っ越してきました。間宮兄弟のように、アラサー二人で散歩をしてご飯を食べて好きなアイドルを応援して楽しく暮らしています。この先の人生どうなるかわからないけど、ささやかな楽しみを大切に過ごしていこうと思える一冊です。

『美しい日本語 荷風』

全三巻

永井荷風
持田叙子・高柳克弘編著
(慶応義塾大学出版会)

関 美智子

この本は、永井荷風生誕140年没後60年を記念して、荷風研究の第一人者で作家の持田叙子・気鋭の俳人高柳克弘が、荷風の美しい日本語を詩・散文、俳句から選りすぐり、堪能できる全三巻からなるアンソロジー。
Iは季節をいとおしむ言葉、
IIは人生に口づけする言葉、
IIIは心の自由をまもる言葉が宝の山のように語っていて、永井荷風文学及び荷風の人生哲学を知る上での入門書でもある。

各巻のカバー表画と裏画は荷風筆。その画が「ようこそ、荷風へ」と読者を荷風の本の世界へやさしく手をさしのべるのである。

『私の見たソネット、ロッセヤ』

小林一三(教育評論社)

『フォン・ノイマンの哲学』

高橋昌一郎(講談社現代新書)

新田 雅司

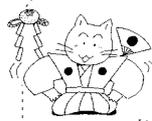
阪急創始者の著者が一九三五年に訪ソした旅行記。一介の実業家の著者が、その合理的知見だけで、ソ連を国家統制資本主義だと見抜き、競争がなくプロパガンダばかりの社会には未来がないと断じた。慧眼を感じるタイムマシンのような一冊。

天才科学者ノイマン。自らの天才性に酔って科学優先主義を唱え「我々が今生きている世界に責任を持つ必要はない」とした。科学技術は、今も昔も、世界を解決はしない。反面教師。





『世界史のなかの昭和史』



半藤一利(平凡社)

大井利雄

『昭和史』、『昭和史戦後篇』、『B面昭和史』三部作の完結編。

昭和史を世界史の視野から「持たざる」島国が欧米列強の攻略や戦略に翻弄された歴史を「現代の視点で」時系列で辿った。半藤さんは、文春入社後、軍事記者の伊藤正徳の担当となり、日本中の戦争体験者の取材に奔走した。この時に「歴史の当事者は嘘をつくこと」を学び軍事関係の作品を書いた。これらの集約が、一連の昭和史といえる。『独ソ戦』(大木毅・岩波書店)、『日本軍兵士』(吉田裕・中央公論新社)、『満州事変から日中戦

争へ』(加藤陽子・岩波書店)などにおいても、権力者、軍部の戦意高揚のもとに恣意的に情報を操作し、無謀な戦いに民衆が引き込まれたかを明らかにする。現在でもデジタル化変革の水面下で蠢いている欲望・権力の渦は、人間の本質的な弱さであり、虚偽に踊らされない目をもたねばならないと思う。

『小説——いかに読み、いかに書くか』



後藤明生(講談社現代新書)

鍛冶勝

アメリカの大学には、クリエイティブ・ライティングという、文学創作コースがある。著者の後藤明生は、世界の潮流をいち早く導入した早大で、作家志望の学生に創作技法を指南した。後藤はその後、NHK文化センターで同種の講義を行った。本書はその講義録。ドストエフスキーがゴーゴリの短編「外套」から何を読みとり自作にどう活かしたか。志賀直哉、芥川ら日本の名作を教材に、小説の創作過程を解析する。

『スモールワールズ』



一穂ミチ(講談社)

中井あつし

著者は一九七八年生まれの、BL小説を主に書いてきた作家さんです。直木賞候補にもなった六篇の連作短編集です。

家庭内暴力、加害者と被害者、幼児虐待、トランスジェンダー等など、様々な現代社会の深刻な問題をテーマにしています。それぞれの小説の構成が巧みで引き込まれます。短編小説と思えぬほどの読後感で、更に連作小説ならではの楽しさも隠されています。次はぜひ長編小説を書いて欲しいと切望する作家さんです。

『もの思う葦』

太宰治(新潮文庫)

向井誠一

太宰治というと破滅人間との印象が強い。しかしこの随想を読むと、別の面が見えてくる。その中

で彼は「崇敬とは我に益するところあらんと願望する情の謂いである。」というデカルトの言に共感し、そのもじりも試みている。私にも思い当たるものがある。戦前の日本には皇室への崇敬を標榜し又それを他に強要する人間が多かった。しかし実は自らの上等ではない心根を發揮させる為の体の良い道具に用いただけであった。おかげで戦前日本は数百万の犠牲者を出して終焉した。では客観的視座を有した彼が何故女との心中にこだわる、即ち崇敬したのである。

これも己に利するあらんとする情が彼に働いたと云えるのではないか。結果彼は昭和文学に確たる地位を勝ち得たのである。

『ブツダが説いた 幸せな生き方』



今枝由郎(岩波新書)

深見弘

ブツダは紀元前五世紀に「生きることは苦である」という真実に対して、苦しみを無くすのではなく苦しみを乗り越えるすべ

を説法した。本書はチベット仏教の薫陶を受けた著者がブツダの人生観を解説しています。よい習慣はよい習性を形成し、よい習性からよい行為が生まれ、よい行為からよい人生が生まれる。そして、幸福な生き方とは過去を悔まず、未来に気を病まず、今の瞬間を懸命に生きることに説いている。斯く存りたし。

おそらく、私は日本人なのだろう。それは紙切れいち枚の上だけで。産れおちた土の上で人の行き先が、本当は？本当は？私達がどんなに沢山の本を読み全てを知ったつもりでも一冊の本の本当は

『ひよろで行け』

ばくきよんみ(栗売社)

武田敬子



とてもつらい目かたらないここから私のからだ中で大きな絶望と太陽と月に動かされつつける私の内臓の臭いを嗅ぐ。そうして決心する。あらゆる事を諦めない。

『桜の文化誌
(花と木の図書館)』

コンスタンス・L・カーカー、
メアリー・ニューマン、
富原まさ江訳(原書房)

宮武 光吉

「サクラ」という字を見て、

日本人は「花見」と解き、欧米人は「サクランボ」と解く。その理由について、アメリカ人の教授が書いた本です。

西洋では、有史以前からサクランボが食され、キリスト教の影響により、果実や花に寓意的な意味を持つようになった。一方で、サクラの花に、深い文化的な意味を見出したのは日本人の功績だと述べている。サクラについて、東西の違いを文化的視点から見ていて、興味深い。

『勝手にふるえてろ』

綿矢りさ(文芸春秋)

大川 めぐみ

著者はどの作品でも、周りが少し浮いていた人間が、一歩

踏み出して他者に働きかけることで変化する様を描いているように感じる。本書では、「こじらせ女」と言われてしまいそう

な主人公の心の機微が、その複雑さを解きほぐすように丁寧に描かれている。理解しがたい言動の中に、共感できるフレーズがぼつぼつとあり、自分を重ねながら主人公を応援していた。ユーモアを交えたテンポの良い文体で、読書初心者にもおすすめ。

『レオナルド・
ダ・ヴィンチの世界』

池上英洋他編著
(東京堂出版)

武内 法行



レオナルド・ダ・ヴィンチについての最近の研究は、かつての美術方面のみのアプローチから、科学や技術、数学、更に音楽や演劇等をもカバーするものに変って来ているやうだ。彼は美術分野だけの人ではないから当然であらうが、この本は何と文系、理系を合せ十八人も専門家を動員し、その論考を集約

して「万能の天才」の謎に迫らうと試みてゐる。

その成果はどうであらうか？ 私個人の感想であるが、編著者の努力にも関わらず今尚レオナルドを捉へ切れてゐないやうに思ふ。当時の素朴な科学や軍事面での彼の発明や誤り等の説明は出来ても、その作品や人物の深淵さには遥かに届いてゐない感じがするのである。

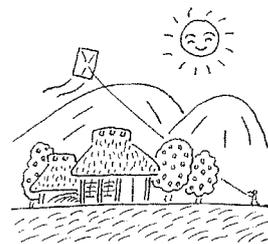
『それでも、日本人は
「戦争」を選んだ』

加藤陽子(朝日出版社)

大久保 芽衣

「歴史」というと、必死に暗記した受験生時代を思い出す。声に出して、単語を書いて、無理やり語呂に当てはめて、それでもなかなか覚えられなくて。もつと早く、この本に出会って良かったと思う。バラバラだったカケラがストーンと落ちていく。頭がクルクルと冴えていく。ああ、「歴史を学ぶ」とは、こういうことなのか。だんだんとわかってくる。なのにひとつ

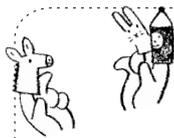
だけわからない。なぜ、著者の先生は、学術会議で任命拒否されたのだろうか。



『僕らが毎日やっている
最強の読み方』

池上彰・佐藤優
(東洋経済新報社)

涌井 明子



知識と教養のかたまりとしか私には思えないこの2人が書いた本です。手にとった瞬間レジに行きました。

池上氏と佐藤氏の仕事場がカラー写真で16ページ紹介されています。本と資料の数の膨大さに圧倒されました。

このお二人のまねはできそうもありませんが、情報収集の方法には参考にできるところがありました。時間の無い人こそ読むべき本だと思います。

『私を離さないで』

カズオ・イシグロ
(早川書房)

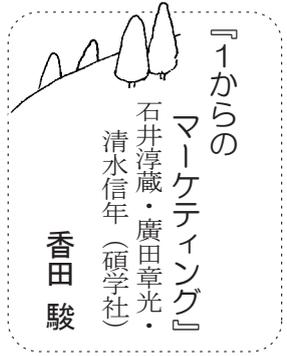
三徳 美月



本の舞台は不思議な寄宿学校、ヘールシヤム。ここでの学校生活は、私達が想像する学校生活とは少し異なる。学校の授業で作成した絵や詩、作品はマダムと呼ばれる学校の外の大人に買われていく。さらに子どもたちは保護官と呼ばれる大人に日々監視され、執拗な健康診断が繰り返されていた。この不思議な学校で育ったキャシー、ルース、トミーは学校を卒業後、この学校の大きな謎に迫っていく。

綾瀬はるか、三浦春馬、水川あさみによってドラマ化されたことのあるこの作品は、ぜひ小説でも手にとってもらいたい。本の中には小説だからこそ楽しめる不思議なカズオ・イシグロワールドが広がっている。





『1からの

マーケティング』

石井淳蔵・廣田章光・

清水信年(碩学社)

香田 駿

みなさんはマーケティングという職業をご存知でしょうか。「名前は聞いたことあるんだけど……」「何やってるんだろう?」など、謎が多い職業だと思いませんか。私はこの本を大学の教科書として買いましたが、マーケティングについての基礎がしっかりと、事例を踏まえて書かれています。もしあなたが本当にしたいことをやろうとした時、会社員では得られない体験・経験を得たくなった時、きつとマーケティングはあなたの手助けをしてくれるはずです。ぜひ、手に取ってみてください!



新着図書から

| | | | |
|-------------|-----------------------|---------------|---------|
| 〈哲学 心理学 宗教〉 | 子どもの発達格差 | 森口佑介 (PHP研究所) | 143 |
| 〈社会科学〉 | この国の「公共」はどこへゆく | 寺脇研(花伝社) | |
| | 権力は腐敗する | 岩本美砂子(岩波書店) | 312 304 |
| | 「命のウイザ」言説の虚構 | 前川喜平(毎日新聞出版) | 312 312 |
| | 移民の人權 | 菅野 賢治(共和国) | 316 329 |
| | 同調圧力の正体 | 近藤敦(明石書店) | 361 361 |
| | ヘイトスピーチと対抗報道 | 太田肇(PHP研究所) | 361 361 |
| | 女人禁制の人類学 | 角南圭祐(集英社) | 361 361 |
| | 平和村で働いた | 鈴木正崇(法蔵館) | 367 367 |
| | 囚われのいじめ問題 | 川村幸輝(あけび書房) | 371 369 |
| 〈自然科学〉 | 新型コロナ超入門 | 北澤毅・編(岩波書店) | |
| 〈工業〉 | これってホントにエコなの? | 水谷哲也(東京化学同人) | 493 |
| | ジョージナ・ウイルソンIIパウエル | (東京書籍) | 519 |
| 〈芸術〉 | 闇の日本美術 | 山本聡美(筑摩書房) | 721 |
| 〈文学〉 | 砂に埋もれる犬 | 桐野夏生(朝日新聞出版) | 91き |
| | 琥珀の夏 | 辻村深月(文藝春秋) | 91つ |
| | 作家の手料理 | 野村麻里編(平凡社) | 91の |
| | 白鳥とコウモリ | 東野圭吾(幻冬舎) | 91ひ |
| | ぼくはイエローでホワイトでちよっとブルー2 | ブレイディみかこ(新潮社) | 91ブ |
| | いつかたどりつく空の下 | 八幡橙(双葉社) | 91や |
| | エレジーは流れない | 三浦しをん(双葉社) | 91み |
| | 郊外の記憶 | 鈴木智之(青弓社) | 910 |

図書室のしごと

「日本の裁判所、裁判官、裁判とその制度的・構造的な問題」



お話 瀬木比呂志(明治大学)

裁判官という職業とその仕事、裁判官たちの人間としてのあり方、彼らをコントロールしているシステムの問題点、そして、裁判官の本質・役割とあるべき姿は、どのようなものなのでしょうか。33年間の裁判官生活の後大学教授となり、多数の一般書や専門書を書かれている瀬木さんに、日本の裁判、裁判官システムの諸問題とその改善策など、現状と課題についてお話しいただきます。

〈瀬木さんの本〉『檻の中の裁判官——なぜ正義を全うできないのか』(角川新書、『絶望の裁判所』(講談社現代新書) ほか

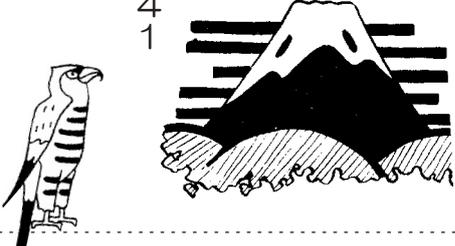
とき 1月23日(日)
朝10時〜12時

ところ 公民館 地下ホール

定員 40名(申込先着順)

申込 1月7日(金)朝9時〜
公民館 ☎(572)5141

*発熱や体調の悪い方は、参加をご遠慮ください。
また、マスクの着用をお願いします。



ブッククラブから

向田邦子著 『思ひ出トランプ』を読む

大山 葉子



作品の感想を書くべきなのは重々承知の上だが、今回ばかりは作品だけでなく向田邦子さんとその時代的背景についても語りたい気がする。

向田さんのテレビドラマが次々と放映され話題となっていた七十年代から八十年は、六十四年の東京オリンピック、七十年の大阪万博と高度経済成長を経て人々の生活は便利に豊かになりつつあった。当時、女性は二十五歳頃までに結婚し家庭に入るのが一般的であり、結婚後も働き続ける女性は限られていた。ましてや三十過ぎで独身で自活している女性の姿はその頃、東京の下町に住んでいた私の周辺にもなかった。三十代の独身女性は二人ほどいたが、どちらも兄夫婦一家と暮らしていた。私の記憶にある彼女達の表情は概して暗く、ひっそりと生きている、そんな印象だった。

今と違い、女性の生き方に多くの選択肢のなかった七十年代にはしかし、アンアン、モア、クロワッサンと女性の自立やライフスタイルをテーマとする雑誌が次々と創刊され、女性達は自分自身に目を向け始めた。そこへ向田さんの登場である。世間的にはオールドミスの筈が、仕事という仕事は評価され超多忙。自身で選び抜いた愛用の品々に囲まれ青山のマンションで猫を飼い、何やら優雅に暮らしている。名門の家柄でも

高学歴のエリート女性でもない、中流家庭出身の一人女性のそんな自由且つ地に足のついた生き方に女性達が驚き、憧れを抱いたのは想像に難くない。向田さんの描く人々が別世界の話ではない、身近で誰もが思い当たる何かであったことも、共感を呼んだ。

さて『思ひ出トランプ』である。何気ない話のようで、よく読むと事件の連続である。最初の『かわうそ』―病気の子供を病院に連れて行くべき処、母親は自分のクラス会行きを優先。手遅れとなり子供は死ぬ。今で言うネグレクトであろう。『だらだら坂』―面接した女性の個人情報私の流用。言語道断、訴えられて当然の行為。『はめ殺し窓』と『三枚肉』は浮気、不倫もの。『マンハッタン』―複数の借金からの夜逃げは、現代の多重債務を思わせる。『犬小屋』は一人の青年による二つの事件。性的暴行と自殺だがどちらも未遂。警察沙汰にならず。『男眉』は事件ではないが、この父親には父親の領域を越えた娘への性的な視線があり、危ういものを感じさせる。次の『大根の月』は事故。『りんごの皮』は恐らく不倫であるが、主人公の時は作者を連想させるキャラクター。『酸っぱい家族』の写真館の主人の行為は、女衞せげんのよう。『耳』―日常の出来事。しかし主人公が家中の物をぶちまける様は、狂気を孕んでいるようにも

見える。『花の名前』―予想外の夫の浮気。最後の『ダウト』は地味ながらかなり深刻。讒訴さんそとあるが、脅迫に近い気がする。

舞台背景こそ違えど、今日のニュースとなってもおかしくない話ばかりではないか。時代は変わっても人間は変わらない。向田さんが生きておられたら「だから私が書いてるじゃない、四十年前に」と微笑まれるのでは。そんな普遍的な人間ドラマを紡ぎ上げた向田邦子さんとその作品の数々が、今も人々を魅了するのは、当然ではないかと思うのだ。

くにたちブッククラブ

―人生、野を越え山こえて―
松本清張
『或る「小倉日記」伝』
(角川文庫)

講師 大木志門
(東海大学・日本近代文学)
とき 1月6日(木)
夜7時半～9時半
ところ 公民館 地下ホール
申込先 公民館 ☎(572)5141

*今年度のブッククラブは
今回が最終回です。



図書室のこと

アイヌの物語世界

お話 中川 裕ひろし
(千葉大学名誉教授)

アイヌの人々は、彼らが生活するうえで大切にしてきた価値観を物語にすることで古くから受け継いできました。文書ではなく、語り継がれることに大きな特徴のあるアイヌ文学は、語り手が減っている現在、言葉や文化の存続が危惧されています。今回はアイヌ文学の魅力についてお話いただき、彼らの独特な世界観や文化に触れる機会したいと思います。

〔中川さんの本〕表題作(平凡社)、『アイヌ語をフィールドワークする』(大修館書店)、『アイヌ文化で読み解く「ゴールデンカムイ」』(集英社新書) ほか多数

とき 2月12日(土) 昼2時〜4時
ところ 公民館 3階講座室
定員 会場受講25名・オンライン受講30名
※いずれも申込先着順



申込 1月13日(木)朝9時〜2月9日(水)夕5時
会場受講：公民館 ☎(0772)5141
オンライン受講：sec_kominkan@city.kunitachi.lg.jp

【件名】講座名【本文】①氏名 ②ふりがな ③住所 ④電話番号
※参加方法の詳細は、前日までにメールいたします。
※当日、参加者側の環境による接続や音声の不具合についての問合せには対応できませんので、ご了承ください。

受講項目
オンライン受講
申し込み
お申し込み

〈私の本棚から 第4回〉

三浦しをん著 『風が強く 吹いている』



中井 あつし

明けましておめでとうございます。私の年明けは、一日はニューイヤーマスク、二日、三日は箱根駅伝をテレビで観戦するのが恒例になっています。本作はその箱根駅伝を扱った数多くの小説の中でも、特に人気がある作品で、著者の三浦しをんさんの代表作でもあります。

長距離走に人並み外れた地力のある大学生二人(四年生のハイジと新一年生の走)が偶然に出会って、同じおんぼろアパートに住む、潜在能力を持つ八人の仲間と箱根駅伝出場を目指し、トレーニングを四月に開始します。

初心者ばかりのチームで初めのうちは散々な記録しか出ないのですが、徐々にトレーニングの成果が出て、ついに半年後、立川市の昭和記念公園で開催された予選会で出場権を獲得します。そして、年の明けた一月二日シード権獲得を目指す、一〇人の「最初で最後の、激しい戦い」が始まります。

冷静に考えれば絶対にありえない設定で、都合主義的な展開だという議論はとりあえず置いて、しをんさんのストーリーにのめりこんで読み進めると、もう読むのが止められなくなります。

この文庫本は六六〇ページほどありますが、

駅伝本番の二日間が二五〇ページにわたって書かれています。ところが圧倒的な読みごたえがあります。箱根駅伝の一〇区間を駆け抜ける選手たちの生い立ちや心の内を細かく描写し、長距離ランナーの孤独を強く感じさせてくれます。そして、苦しくなっても他のメンバーのために全力を尽くして走り続けていきます。

果たして、この一〇人だけの駅伝チームは一〇位以内に食い込んで、次回のシード権を獲得できるのか？

面白く、感動し、涙し、笑いもあります。上意下達の徹底管理型のスポーツ哲学へのアンチテーゼもあり、「速いだけじゃだめだ、長距離選手は強くないといけない」というハイジの言葉は人生哲学のようにも聞こえました。

箱根を走る各個人の思いは様々ですが、選手一〇人のキャラがとても輝いています。駅伝好きとしては、最高の小説です。(新潮文庫)



公民館図書室 休室のお知らせ

蔵書点検のため、休室します。
ご理解とご協力をお願いします。

休室期間
2月1日(火)〜
2月3日(木)まで

※新聞は、休館日の月曜を除き
朝9時から夕方5時までの間
2階事務室前で閲覧できます。

